海のワイズユースを意識した海洋性レクリエーションのあり方 —特別セッションのまとめ—

A PRESENT PERSPECTIVE ON MARINE RECREATIONS WITH CONSIDERATION OF THE WISE USE OF THE OCEAN ENVIRONMENT

小島治幸[1]・伊藤一教[2]・津嘉山正光[3]・木村克俊[4]・清水隆夫[5]・古川恵太[6]
Haruyuki KOJIMA, Kazunori ITOH, Seiko TSUKAYAMA, Katsutoshi KIMURA, Takao SHIMIZU, and Kieta FURUKAWA

[1]正会員　工博　九州共立大学　（〒807-8585 北九州市八幡西区自由が丘1-8）
[2]正会員　博士（工）　大成建設（株）　（〒245-0051 横浜市戸塚区名瀬町344-1）
[3]正会員　工博　琉球大学　（〒903-0213　中頭郡西原町千原１）
[4]正会員　工博　室蘭工業大学　（〒050-8585　室蘭市水元町27-1）
[5]正会員　工博　電力中央研究所　（〒27-1194　我孫子市我孫子1646）
[6]正会員　工博　国土技術政策総合研究所　（〒239-0826　横須賀市長瀬3-1-1）

This paper presents a summary of the special session "Marine Recreation" The aim of the session lies on identifying relationship between marine recreations and tourism industries as well as sustainable management of marine recreational developments. The session consists of two parts: one part is presentation of the papers regarding with marine recreations and the other part is a panel discussion among panelists presenting the papers. Presented are 12 regular papers concerning various aspects of marine recreational activities and four invited papers concerning major marine recreational activities in Okinawa and tourism policies relevant to marine recreations. Among various topics discussed, contribution of marine recreations to tourism industries and management of ecotourism are most discussed.

Key Words: *marine recreation, ecotourism, sustainable development, environmental preservation, recreational infrastructures*

1．はじめに

近年，ダイビングやパーソナルウォータークラフト，カイトサーフィン，エコツーリズムなど新しく，多彩な形態の海洋性レクリエーションが普及してきている．一方，海洋性レクリエーションは，国の地域活性化策の一つである観光振興の推進において重要な役割を担っている．それでは，海洋性レクリエーションとは何であろうか．畔柳[1)]によると，海洋性レクリエーションとは，直接的に海を利用したり，間接的に海を利用したりして行われるレクリエーション活動の総称として捉えられている．すなわち，セイリングやダイビング，海水浴などの海や海辺でなければ成立し得ない海に依存した活動と海辺で楽しむことのできる海洋景観の探勝やキャンプ，サイクリングなどの海に関連した活動の２つに大きく分類することができる．これらの活動の特徴として，空間スケールの大きさや海面・海中・海底といった場の違い，波・風，流れなどの独特な自然条件，豊かで多様な生態系，美しい景観などが時空間的に変化し，利用者が多種多様な環境を楽しむことができることが上げられる．このように多種多様で掛け替えのない自然環境を利用して成り立つ海洋性レクリエーションは，反面，その自然環境を何らかの形で破壊することにつながる危険性も秘めていることになる．海のワイズユースを意識した海洋性レクリエーションのあり方を十分に理解することが今求められていることであろう．

本特別セッションで取り上げられ，また最近盛んになってきている新しい形の海洋性レクリエーションに関してまとめると以下のようになる．

・各種の水上の乗り物を利用したもの：パーソナ

ルウォータークラフト，カヤック，ヨット，モーターボート

- 水中の自然環境を楽しむ：スキン・スキューバーダイビング
- 海の広大なスペースと特徴的な物理環境を利用したもの：サーフィン，ボディーサーフィン，ウインドウサーフィン，カイトサーフィン
- エコツーリズム[2)]：観光による持続的発展は、すなわちエコツーリズムの実現であり、エコツーリズムの実現は、自然環境の保全であるとする考え方は短絡的な側面を持っている。エコツーリズムとは、自然生態系の持つ回復弾力性の範囲内で、自然環境を最大限に活用していこうとする考え方であって、マスツーリズムの考え方とは異なった概念を持っている。地域の伝統文化や、生活様式は、地域固有の自然環境を前提として成立していると考えられる。エコツーリズムを考えていく際には、単に自然環境の内容やその価値ばかりを論ずるのではなく、社会との関連性の中で、地域が持つ固有の文化に関しても、あわせて論じていくことが求められる。エコツーリズムは、その活動内容から6つのパターンに分類される。
  ① 野生生物を対象とするもの
  ② 自然環境を体験するもの
  ③ 伝統文化を対象とするもの
  ④ 陸域での活動を行うもの
  ⑤ 沿岸部での活動を行うもの
  ⑥ 行祭事への参加を行うもの

今回の特別セッションでは，上述した論点に関して議論をすることを目的とし，わが国において海洋性レクリエーションが最も盛んである沖縄で開催されることから，次の内容に関する招待講演を行った．

- 沖縄で行われている様々な海洋性レクリエーションの紹介
- 海洋性レクリエーション活動が健全に行える施設整備のための理念と技術的課題
- 海洋性レクリエーション活動と環境保全との共生に向けた取組や課題
- 海洋性レクリエーションと観光産業に関する政策的な取組と課題

次に，パネル討論においては，以下に示す２つの重要な論点ついて議論を行った．

- 海のワイズユースを意識した海洋性レクリエーションと観光事業はどうあるべきか
- 海のワイズユースを意識した海洋性レクリエーションと自然環境との共存はどうあるべきか

本文は，上述したような，発表論文の内容をまとめるとともに，討論会で出された意見等を報告するものである．

2．発表論文

一般公募により応募された論文は，「海岸利用」と「レクリエーション」の２つのセッションで発表され，表－１にまとめられている．

特別セッションで発表された論文のタイトルと発表者を以下に示すとともに，講演内容の概略を表－２に示す．

1) 沖縄県における環境と利用を考慮した海岸再整備の意義と可能性：古波蔵　健（沖縄県土木建築部河川課）[3)]
2) 沖縄における海洋性レクリエーションの現状と展望：柳生徹夫（沖縄県セーリング連盟理事長）[4)]
3) 沿岸域におけるエコツーリズムの可能性と課題：小濱　哲（名桜大学）[2)]
4) 海洋性レクリエーションと観光政策：坂田和俊（国土交通省総合政策局観光部）[5)]

3．パネルディスカッション

パネルディスカッションのオーガナイザーは琉球大学の津嘉山正光教授が務め，パネラーは依頼講演の古波蔵　健，小濱　哲，柳生徹夫，坂田和俊の４氏と一般公募による論文発表者の中から柵瀬信夫，赤倉康寛，関いずみの３氏である．

表－１　一般公募の論文

論文番号	海岸利用（座長：小島治幸）	論文著者
31	海岸保全工としての人工養浜の特性評価の試み	堀田新太郎，針貝聡一 久保田進
32	旧沿岸域要塞における景観・空間の価値評価に関する研究	岡田昌彰
33	石川県沿岸域における漂着・散乱ゴミの分析	矢内栄二，布本博 吉田茂，濱本奈美
34	人工磯の利用実態とその評価に関する現地調査	井上雅夫，橋中秀典 田中賢治，島田広昭 西澤博志，中村美香
35	湘南・鵠沼海岸の漁業体験型地曳網について	柵瀬信夫，葉山一郎
36	沖縄における港湾を活用した自然体験学習・エコツアーの可能性について	石原正豊，赤倉康寛 大岡秀哉，大田　操
論文番号	レクリエーション（座長：清水隆夫）	論文著者
37	人々の海岸の原風景を海岸整備に活用するための手法について	辻本剛三，柿木哲哉 角野昇八
38	スペイン地中海沿岸のマリーナ施設と利用状況	奥薗英明
39	四国東部のサンゴ生息海域における環境改善方針についての検討	中野　晋，川口　始 内田紘臣，御崎　洋 小笠義照，安藝浩資
40	大森ふるさとの浜辺整備事業-事業実施と合意形成のプロセス-	中瀬浩太，里見　勇 藤澤康文，五十嵐美穂
41	都市漁村交流推進に資する組織形成に関する考察	関　いずみ，林　浩志 押谷美由紀
42	都市漁村交流活動の実態と振興のための課題について	押谷美由紀，関いずみ 林　浩志，西崎孝之

討論会を始めるにあたり，各パネラーから，海洋性レクリエーションと観光産業とのかかわりに関する現状と将来的な展望および自然環境との共存に関して次のような発言があった．

- 海岸整備の立場からは，観光振興・ﾘｿﾞｰﾄ化に向けた海岸再開発が必要であると考えるが，背後地の利用が重要で陸域海域一体の開発が重要である．つまり，地域一体型でデザインすることが必要になる．
- 沿岸域の開発には原風景に近い整備が必要である．
- 船から沖縄の海岸を見ると，自然海岸が多く残っており沖縄の人すら驚くほど美しい．レクリエーションのあり方の中に「癒しの効果」があるわけで，船に乗って景色を見るだけでもレクリエーションになる．沖縄で計画されているマリーナの収容能力は2000隻程度，実際に沖縄にある船は5000隻と言われている．しかし，料金が高いため県民の利用率は低いと予想される．全国的に見れば船をマリーナに係留したい人は多いので，積極的に県外のオーナーに提供してはどうか．それによって，船をメンテナンスする業が立ち上がり，船に乗るために県外から人が集まり，観光事業の一部になるのではないか．
- 沿岸部の活用は魅力的だが，現段階では漠然としているので，まずは港湾部から手をつけてはどうか．港湾計画の中で後背地と一体化した開発をすれば，海のレクリエーション，陸域での飲食・ｺﾐﾆｭｹｰｼｮﾝが期待できるため有効であると考える．また，港湾内での環境教育も必要であると考える．港湾計画には港湾利用者（海事業者など）の意向を汲み上げる社会分析が必要で，港湾利用者の意見を反映させた海洋性レクリエーションが必要である．
- 観光産業としては，地域の魅力（自然環境，社会環境）を発見しアピールすることが必要である．地域の魅力は地元の人が知っている．その魅力をガイドする業を新しい観光産業としてはどうか．
- 港湾内でエコツアーや環境学習を実施することは，現段階では現実問題として難しい．しかし，都市からのアクセスや駐車場，緑地，シャワーなどの設備面からは高いポテンシャルを持っている．エコツアーや環境学習を実施するためには，ゾーニングなどの手法が課題である．
- 石垣島では，夏場に漁業を中止しサバニクルー

表－２　招待講演の講演者と内容，質疑

企画意図	題名・講演者	講演の内容	質　疑
海洋性レクリエーション活動が健全に行える施設整備のための理念と技術的課題	沖縄県における環境と利用を考慮した海岸再整備の意義と可能性 古波蔵　健（沖縄県土木建築部河川課）	護岸やフェンスで遮られた海岸（道路から直接海が見えない）は，国際的都市型リゾート海岸を再生する上で改善すべきである．そのためには，再整備の評価・波及効果の議論，行政や市民のコンセンサスを得ることが重要である．	トロピカルビーチには海岸の連続性を阻害するフェンスなどがある．これは縦割り行政の弊害であるから改善する必要がある．
沖縄で行われている様々な海洋性レクリエーションの紹介	沖縄における海洋性レクリエーションの現状と展望 柳生徹夫（沖縄県セーリング連盟理事長）	ﾄﾛｰﾘﾝｸﾞ，ｶｲﾄｻｰﾌｨﾝ，ﾎﾞﾃﾞｨｰﾎﾞｰﾄﾞ，ジェットｽｷｰ，ｳｴｲｸﾎﾞｰﾄﾞ，ｼｰｶﾔｯｸ，ﾀﾞｲﾋﾞﾝｸﾞ，ｻﾊﾞﾆｸﾙｰｽﾞの紹介．これらのﾚｼﾞｬｰは，沖縄と他県のｼｮｯﾌﾟ間連携が充実しており，他県からのﾚｼﾞｬｰ客を確保している．ﾀﾞｲﾋﾞﾝｸﾞでは，毎年死亡事故があり，安全教育の重要性が述べられた．マリーナ建設にあっては，画一的で豪華なマリーナだけでなく，そこの海岸線を生かした庶民的なものもつくってもらいたい．	
海洋性レクリエーション活動と環境保全との共生に向けた取組や課題	沿岸域におけるエコツーリズムの可能性と課題 小濱　哲（名桜大学）	自然を活用した観光と保護を議論する場合，自然の付加価値を活用し，経済的効果・社会的文化的効果を合わせて議論する必要がある．エコツーリズムを単に自然保護と関係つけて護ることばかりを考えるのではなく，観光も社会システムの中に位置付け，自然環境とともに社会環境（経済的社会文化的影響）も含めて，自然を保護し活用していくことが重要である．そのためには，マスタープランが重要になる．従来沿岸部は防災一色であったが，ﾕﾆﾊﾞｰｻﾙﾃﾞｻﾞｲﾝを取り入れた海岸を望む．	
海洋性レクリエーションと観光産業に関する政策的な取組と課題	海洋性レクリエーションと観光政策 坂田和俊（国土交通省総合政策局観光部）	観光政策の流れ，旅行観光の経済効果，海洋性ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝに関わる施策について紹介された．規制緩和における特区として海洋性ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝに関わるものは少ない．このことは海洋性ﾚｸﾘｴｰｼｮﾝには規制緩和が必要ない分野とも考えられる．	

ズで見せる漁業を実施している．目的意識のはっきりした活動が大切である．地域のシステム（この場合，漁労文化）を利用し，護りながら行う観光が大切であると考える．

・湘南の地引網の場合，地域の人が地元の楽しいものを探して楽しんでいるのが実態である．

・沖縄コンベンションセンター周辺のトロピカルビーチは人工ビーチであるが，一部自然のビーチが残っている．それは，環境教育の場になっている，自然を残すことが海洋性レクリェーションを楽しみ深めるといった付加価値を生んでいる．したがって，自然を残せるものは残したほうが良いと考える．

会場の聴衆者とパネラーとの間で，以下のような討論がなされた．

Q：沖縄では観光客が増加しているが平成12年頃から観光収益が減っている．これは，宿泊が減っているからか？観光行動のパターンに変化がおきているのか？

A：沖縄にはリピーターが多く，同じ買い物などはしないので，消費が進まないのではないか．ホテルや乗り物など全般的なコストダウンによると考える．

コメント：沖縄の埋立は，小さな島にもかかわらず全国2位である．残された自然は多くない．開発優先で自然を破壊すべきではないのではないか．

Q：自然再生を持続的に実施するためにエコツーリズムの考え方があると思っている．過疎地域にエコツーリズムを取り入れる場合に，主体となる母体はどこになるべきか？県か市町村か？

A：どこが主体にやるかは，エコツーリズムが始まったばかりなので，現在は行政がすることになろう．採算性が確保できるレベルに達するのであれば，最終的に民間が母体になるとおもわれる．エコツーリズムの草創期から採算が取れるようになるまでの過渡期にあっては，NPOが主体になるのではないか．なぜなら，行政が母体になると負担が大きすぎる．

Q：NPOということであるが，持続的に実施するためには費用が必要である．体験型レクだけでも人を集めることは難しく，さらにエコを加えるとエコツーリズムを実施していく具体的方法論が見当たらない．

A：エコツアーの内容がいかに充実しているか，それをガイドできる人のレベルが十分に高いことがポイントである．付加価値の高いものを目指すことが大切で，ガイドの資格制度を設けることもいいのではないか．

A：沖縄では地元の人がガイドをし，6000円／人という決して安くないガイド料ではあるが，リピーターが多いツアーもある．このような先進的な事例から，資格制度などで護ってあげることは，持続的な実施につながるのではないか．

・海洋性レクリェーション（乗物，気象海象，生物，文化など）に関する資格制度が有効ではないか．これが観光の質の向上，人材育成が期待できる．

・海洋性レクリェーション，観光事業ともに自然があるから成立するものであるから，自然を護ることが大切である．

コメント：エコツーリズムに関して重要な点は、エコツーリズムを単に自然保護と関連させて、護ることばかりを考えるのではなく、観光の社会システムの中に位置づけ、自然環境とともに社会環境も含めて、保護し活用していくことである。このような社会システムを実現していく、観光政策と総合政策が、他の地域でも応用できるレベルであることも重要である。

4．まとめ

海洋性レクリェーションが活発な沖縄における多様な形態の活動が紹介されるとともに，これに関する資格制度を導入することによりレクリェーションの質を向上させることが期待できるとの考えが示された．海洋性レクリェーションと観光産業との連携で重要となる施設整備に関しては，海岸の原風景に近い形での整備を目指す方向性が示された．また，持続可能な海洋性レクリェーションの新しい形態としてエコツーリズムに関する現状と課題，将来の展望が明らかにされた．特に，持続可能なエコツーリズムとして，自然環境とともに社会環境も含めて保護し活用していくことが重要な点であると強調された．

今回の反省点として，観光事業的な観点の色が濃くなりすぎ，工学的な論点から遠ざかってしまった．また、「海洋性レクリェーションと自然環境との共存はどうあるべきか」については，ほとんど議論ができず、目標としたところの半分程度しか到達することができなかった．これは海洋性レクリェーション全体を取り扱うようなテーマを掲げたためで，今後はもっと的を絞ったテーマ設定が必要であろう．

参考文献

1) 畔柳昭雄：海洋性レクリェーション施設，技報堂出版，305p，1997.

2) 小濱 哲：沿岸域におけるエコツーリズムの可能性と課題，海洋開発論文集，Vol.20，pp.45-49，2004.

3) 古波蔵 健：沖縄県における環境と利用を考慮した海岸再整備の意義と可能性，海洋開発論文集，Vol.20，pp.33-38，2004.

4) 柳生徹夫：沖縄における海洋性レクリェーションの現状と展望，海洋開発論文集，Vol.20，pp.39-43，2004.

5) 坂田和俊：海洋性レクリェーションと観光政策，海洋開発論文集，Vol.20，pp.51-56，2004.